

東藝術俱樂部江戸勉強会
甲州街道 諏訪宿・台ヶ原宿編

平成27年(2015年)11月14日～15日

東藝術俱樂部



**JR上諏訪駅にて午前11時
参加者15名全員集合です**



展望台の立石公園にて諏訪の地形と歴史の勉強です

諏訪湖の地形・気象



諏訪湖は長野県中部の諏訪盆地に位置し、岡谷市、諏訪市、諏訪郡下諏訪町にまたがり、面積は長野県内最大の湖沼。

河川法では、天竜川(一級河川)水系の一部として扱われる。

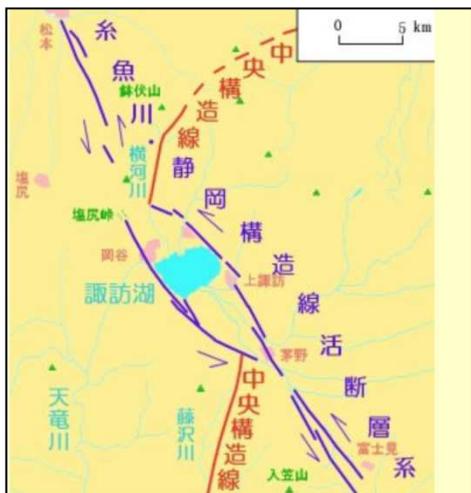
新生代第三紀の終わり頃からの中央高地の隆起活動と糸魚川静岡構造線の断層運動によって、地殻が引き裂かれて生じた構造湖(断層湖)である。また糸魚川静岡構造線と中央構造線が交差する地で、諏訪湖を取り囲むように諏訪湖南西側を諏訪湖南岸断層群、諏訪湖北東側には諏訪断層群がある。「かつて、諏訪湖からの水は東の釜無川方面に流れていたが、八ヶ岳からの噴出物によって堰き止められ、南下するようになった」との説がある。また、時代と共に流入河川からの土砂の堆積や、護岸工事などにより面積は徐々に縮小している。

諏訪湖はかつて非常に水質のよい湖であり、江戸期には琵琶湖や河口湖からの蜆が放流され漁業も行われていた。しかし、戦後の高度経済成長期にかけて農地からの化学肥料由来の栄養塩類や生活排水などにより湖の富栄養化が進み、過栄養湖へと変化した。特に1970年代から80年代にかけては、ユスリカやアオコのマイクロキスティスが大発生し湖面が緑色になり、悪臭が漂い発泡するなどといった環境悪化が見られた。水質悪化の要因は沢山あるが、流入河川が30を超え多いにも関わらず、流出河川が一つであり、かつ集水域が広く各流入河川の汚染物質が溜まり易い構造になっているからである。しかし、1979年(昭和54年)から一部供用開始し1993年(平成5年)全市町村共用となった流域下水道の整備事業などや市民による水質改善活動の結果、大幅に水質が改善されているが、昭和初期の姿を取り戻すまでには至っていない。

かつては毎年のように厚い氷が湖面をおおい、湖面ではワカサギの穴釣りをはじめ、アイススケートなども行われていたが、近年は全面氷結の頻度が減少している。また、氷も薄くなっており、スケートなどを行うのは危険を伴う。ワカサギの穴釣り以外に陸釣りをする釣り客、船釣り客が訪れる。

気候は、周囲を北東にかけては八ヶ岳に連なる山々、南西にかけては南アルプスに連なる山脈に囲まれ、それらの山々と諏訪湖の影響を受け、内陸性気候の特色を示す県内にありながら、例えば、春夏秋季の降水量は県内比で多め、冬季の降水量は圧倒的に少ないというように、内陸気候の中でも特徴的な気象環境下にある。

諏訪湖の形成

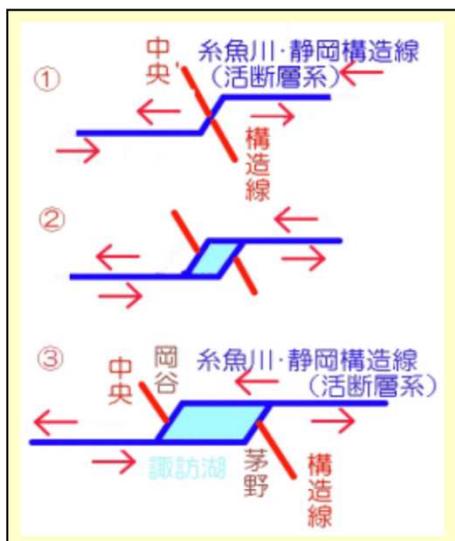


中央構造線と糸魚川－静岡構造線は諏訪湖で交わっています。糸魚川－静岡構造線の東側はフォッサマグナ地域で、新第三紀の海の地層におおわれています。

しかし、岡谷の横河川の上流には、三波川変成帯の緑色片岩・黒色片岩・蛇紋岩が顔を見せています。そこで、諏訪湖の北東側では、岡谷の横河川が中央構造線の延長と考えられます。中央構造線は、茅野から岡谷まで12kmくらいがっています。

この中央構造線の食いちがいは、現在の諏訪湖をつくっている断層活動によると考えられます。長野県～山梨県の糸魚川－静岡構造線に沿って、現在の活動的な断層が生じています(その動きの向きは、新第三紀にフォッサマグナができたときとは、変わっています)。諏訪湖地域では左横ずれ断層になっています。

諏訪湖は糸魚川－静岡構造線活断層系がつくっている



断層がややSカーブした状態で、横ずれ断層運動が生じると、カーブの形とずれの向きの関係で、カーブの部分が引っ張られて落ち込んだり、カーブの部分が盛り上がったります。横ずれ断層により、引っ張られて落ち込んでできる陥没地を、「プルアパートベイズン」といいます。押されて盛り上がる場合は「プレッシャーリッジ」といいます。

諏訪湖は糸魚川－静岡構造線沿いの現在の活発な左横ずれ断層によるプルアパートベイズンです。南東の富士見町には、プレッシャーリッジがみられます。

諏訪湖を取り囲む山の尾根には、第四紀はじめに存在した塩嶺火山の溶岩(諏訪の鉄平石)が載っています。諏訪盆地の地下の人工地震探査により、諏訪湖の湖面の下500mに硬い岩があることが分かりました。これが、湖面より数100m高い周囲の山に載っている「塩嶺溶岩」と同じなら、諏訪湖の部分は、約1000m沈降したことになります。けれども、まわりの川から流れ込んだ泥で埋められ、現在の諏訪湖の水深は7mしかありません。

茅野市坂室での宮川の川筋の屈曲や丘の食いちがいがから、現在の断層の左横ずれ速度は、1000年間に5mていどという見積もりと、1000年間に10mていどという見積もりがあります。仮に1000年間に10mとすると、中央構造線の茅野～岡谷の12kmの食いちがいは120万年かけて生じたことになります。最後に塩嶺溶岩が流れたのは約140万年前で、それ以後の横ずれで諏訪湖が陥没したとすれば、中央構造線の12kmの食いちがいが120万年かけて生じたという見積もりと合ってきます。

御神渡し(おみわたり)



冬期に諏訪湖の湖面が全面氷結し、氷の厚さが一定に達すると湖面の氷が昼夜の気温差に応じて膨張と収縮する為、昼間の気温上昇で氷がゆるみ、気温が下降する夜間に氷が成長するため「膨張」し湖面の面積では足りなくなるため、大音響とともに湖面上に氷の亀裂が走りせりあがる。プレッシャー・リッジも参照のこと。

この自然現象を御神渡し(おみわたり)と呼ぶ。御神渡りが現れた年の冬に無形民俗文化財に指定されている御渡し神事(みわたりしんじ)が八剱神社の神官により諏訪湖畔で執り行われる。御渡し神事では、亀裂の入り方などを御渡帳(みわたりちょう)などと照らし、その年の天候、農作物の豊作・凶作を占い、世相を予想する拝観式が行われる。古式により「御渡注進状」を神前に捧げる注進式を行い、宮内庁と気象庁に結果の報告を恒例とする。尚、御神渡しはその年の天候によって観測されないこともあるが注進式は行われ、観測されない状態を「明けの海(あけのうみ)」と呼ぶ。

御神渡しは、できた順に「一之御神渡し」、「二之御神渡し」(古くは「重ねての御渡し」とも呼んだ)、二本の御神渡りが交差するものは「佐久の御神渡し」と呼ぶ。御渡し神事にて確認、検分の拝観がなされる。

御神渡しは湖が全面結氷し、かつ氷の厚みが十分ないと発生しないので、湖上を歩けるか否かの目安の一つとなる。ただし氷の厚さは均一でなく、実際に氷の上を歩くのは危険をとまなう行為である。

平安末期に編纂された歌集『山家集』に「春を待つ諏訪のわたりもあるものをいつを限にすべきつららぞ」と記されていること、1397年に室町時代に諏訪神社が幕府へ報告した文書の控え『御渡注進状扣』に「当大明神御渡ノ事」とあることから、古くは平安時代末期頃には呼称があったとされている。

御神渡りの記録は、古くは1443年から1681年迄の『当社神幸記(とうしゃしんこうき)』、1682年から1871年迄の『御渡帳(みわたりちょう)』があり、現在(2013年)まで毎年記録され続けている。一部欠損している年もあるが、2013年迄含めると約568年間のほぼ連続した気象記録であり世界的に貴重な資料であるが、時代によっては御神渡し発生の有無を盛り上がり現象の確認では無く氷の割れる音を聞いて観測していた可能性が指摘されるなど均質なデータとは成っていない。

諏訪の遺跡・諏訪氏・諏訪藩(高島藩)



蛇体文装飾付釣手土器
諏訪地区最大の穴場遺跡から出土
縄文時代中期中葉（約4500年前）



旧石器時代から1万年前の縄文前期にかけての
黒曜石の原石、石核、石刃、剥片などが霧ヶ峰、
和田峠などから持ち出されてきたもの

諏訪市域には縄文、弥生時代からの考古遺跡が分布し、高原を中心に集落遺跡が分布している。下諏訪の和田峠を始めとする黒曜石による石器、また、縄文・弥生時代の土器の破片も出土している。

諏訪氏は代々、諏訪大社の大祝(おおほうり)を務めてきた一族である。その血筋は「神氏」といい、欽明朝や推古朝の頃から平安時代初期に信濃国地方政治で活動した金刺氏や他田氏の名が諏訪社の神官として続いて来た。

出雲神話の神・建御名方神(タケノミナカタヌシ)に始まるともいう。後世には桓武天皇を祖とするとも清和源氏の源満快を祖とするとも称したが、皇胤や摂関家をはじめとする公卿の末裔を称する武家が多い中で祭神・建御名方命の血筋を称しながら極めて尊貴な血筋としてとらえられた特異な家系といえる。

諏訪氏は武士と神官双方の性格を合わせ持ち、武士としては源氏、執権北条氏の御内人、南朝方の武将、足利將軍家の奉公衆を務めるなど、ごく一般的国人領主である。しかし、神官としては信濃国及び諏訪神社を覬請した地においては絶対的神秘性をもってとらえられた。信濃国一宮として朝廷からも重んじられたこともあるが、祭神の諏訪明神が軍神であることから、古くから武人の尊崇を受けていたことも大きく影響している。

故に諏訪神社の祭神の系譜を称し、諏訪神社最高の神職たる大祝を継承し、大祝をして自身の肉体を祭神に供する体裁をとることで、諏訪氏は絶対的な神秘性を備えるようになったといえる。代々の諏訪氏当主は安芸守などの受領名を称したが、大祝の身体をもって諏訪の祭神の肉体とされることで正一位の神階を有し、高い権威を誇示した。

戦国時代、諏訪の地は諏訪神社の大祝(おおほうり)である名門・諏訪氏の支配下にあった。

しかし天文11年(1542年)、武田信玄(晴信)の侵攻を受けて諏訪頼重は切腹となり、諏訪氏の宗家は滅亡した。しかし頼重の従兄弟に当たる諏訪頼忠は、武田氏支配下の中で神官として生き残り、1582年に武田勝頼が織田信長・徳川家康の連合軍によって滅ぼされ、さらに同年6月、信長が本能寺の変で横死すると、頼忠は自立して諏訪氏を再興する。その後、信濃に侵攻してきた家康軍と戦ったが、やがて家康と和睦し、その家臣となった。天正18年(1590年)、徳川氏が関東に移封されると、頼忠も家康に従って諏訪を離れ、武蔵国奈良梨(のち、上野国那波郡惣社へ移封)に所領を与えられた。

代わって日根野弘就の子・高吉が諏訪氏の移った同年に入封する。そして高吉の子・吉明が家督を継いだ。慶長6年(1601年)下野壬生藩に移封(一説には滅封)される。

同年、諏訪頼忠の子・諏訪頼水が旧領・高島に復帰した。所領は当初は2万7,000石、のち大坂の陣に参陣した第2代藩主・忠恒はその功績により元和4年(1618年)に5,000石を加増され、3万2,000石となる。第3代藩主・忠晴の時代に忠恒の遺言により忠晴の弟の頼蔭と頼久にそれぞれ1,000石を分知して3万石となった。以後、諏訪氏の支配で明治時代に至った。

天保7年(1836年)の天保騒動では甲府勤番の命を受けて一揆鎮圧のために甲州に派兵。天狗党の乱では元治元年(1864年)11月に諏訪藩兵は松本藩兵と共同して中山道の和田峠で天狗党と交戦したが、敗北している(和田嶺合戦、樋橋戦争)。

明治元年(1868年)の戊辰戦争では新政府軍に与し、甲州勝沼の戦いや北越戦争・会津戦争に参戦した。

明治4年(1871年)の廃藩置県により高島県となる。その後、筑摩県を経て長野県に編入された。なお、諏訪氏は明治17年(1884年)子爵となり華族に列せられた。

諏訪大社

諏訪大社(すわたいしゃ)は、長野県の諏訪湖周辺4ヶ所にある神社。式内社(名神大社)、信濃国一宮。旧社格は官幣大社で、現在は神社本庁の別表神社。神紋は「梶の葉」。

全国に約25,000社ある諏訪神社の総本社である。旧称は**諏訪神社**。通称として「お諏訪さま」「諏訪大明神」等とも呼ばれる。

諏訪湖を挟んで、以下の二社四宮の境内が鎮座する。

上社(かみしゃ)

本宮(ほんみや) 前宮(まえみや)

下社(しもしゃ)

秋宮(あきみや) 春宮(はるみや)



上社神紋「諏訪梶の葉」
神紋は上社が四根の梶
下社は五根の梶

上社は諏訪湖南岸、下社は北岸に位置し遠く離れているため、実質的には別の神社となっている。なお「上社・下社」とあるが社格に序列はない。

創建の年代は不明だが、日本最古の神社の1つといわれるほど古くから存在する。『梁塵秘抄』に「関より東の軍神、鹿島、香取、諏訪の宮」と謡われているように軍神として崇敬された。また中世に狩猟神事を執り行っていたことから、狩猟・漁業の守護祈願でも知られる。

社殿の四隅に御柱(おんばしら)と呼ぶ木柱が立っているほか、社殿の配置にも独特の形を備えている。社殿は多数が重要文化財に指定されているほか、6年に一度(7年目に一度)催される御柱祭で知られる。

祭神

建御名方神(たけみなかたのかみ)

上社本宮祭神。『古事記』の葦原中国平定(国譲り)の段において、大国主命の御子神として登場する。母は沼河比売(奴奈川姫)とされる。『先代旧事本紀』には建御名方神が信濃国諏方郡の諏方神社に鎮座すると明示されている。

八坂刀売神(やさかとめのかみ)

上社前宮・下社主祭神。建御名方神の妃。

なお、本来の祭神は出雲系の建御名方ではなくミシャグチ神、蛇神ソソウ神、狩猟の神チカト神、石木の神モレヤ神などの諏訪地方の土着の神々であるという説もある。

諏訪大社には本殿と呼ばれる建物が無い。代わりに秋宮は一位の木を春宮は杉の木を御神木とし、上社は御山を御神体として拝している。

古代の神社には社殿がなかったとも言われており、諏訪大社はその古くからの姿を残している。

御柱祭



諏訪大社の社殿の周りには、御柱(おんばしら)と呼ぶ以下4本のモミの柱が立てられている。柱の樹皮は本来は剥がさなかったが、1986年頃以降剥がすようになった。

一之御柱 - 拝殿に向かって右手前(前宮・秋宮・春宮の場合。本宮は左手前)

二之御柱 - 向かって左手前(本宮:左奥)

三之御柱 - 向かって左奥(本宮:右奥)

四之御柱 - 向かって右奥(本宮:右手前)

前宮・秋宮・春宮では一之御柱・二之御柱は正面を向いているが、本宮では南方の守屋山の方向を向いている。諏訪地方では、大きい神社から小さい祠にいたるまで、当社にならってこの御柱を設ける社が多い。御柱の由来は明らかでなく古来より説があるが、今日では神霊降臨の依り代説、聖地標示説、社殿建て替え代用説が検討の余地を残している。

諏訪大社の御柱は寅と申の年に建て替えられ(御柱祭)、全国の諏訪神社や関連社でも同様の祭(小宮祭)が行われる。『諏方大明神画詞』には平安時代初期の桓武天皇年間(781年-806年)に御柱祭実施の記載があり、その頃にはすでに御柱が設けられていたとされる。

御柱祭(おんばしら)は7年目毎、寅と申の年に行われます。正式名称は「式年造営御柱大祭」といって宝殿の造り替え、また社殿の四隅に「御柱」と呼ばれる樹齢200年程の樅の巨木を曳建てる諏訪大社では最大の神事です。

勇壮さと熱狂的ぶりで、天下の大祭としても全国に知られている御柱祭は、古く、804年桓武天皇の御代から、信濃国一国をあげて奉仕がなされ盛大に行われる様になり、現在でも諏訪地方の氏子20万人以上と訪れる親戚、観光客がこぞって参加し、熱中するお祭です。

御柱祭は上社、下社それぞれに山から直径約1m、長さ約17m、重さ10tにもなる巨木を8本切り出し、上社は約20km、下社は約12kmの街道を、木遣りに合わせて人力のみで曳き、各お宮の四隅に建てるものです。

4月の「山出し」と5月の「里曳き」とがあり、山出しでは、たくさんの観衆が見守るなか巨木の御柱が次々と坂を下る「木落し」、上社では冷たい水が流れる川を曳き渡る「川越し」あり、男の度胸試しにふさわしい壮観な見せ場があります。里曳きでは、長持ち、騎馬行列など時代絵巻が見もの。

大社の御柱がすむと諏訪地方の神社では御柱祭が行われます(小宮祭と言う)。この年は諏訪大社の御柱祭から始まり小宮の御柱祭で一年が終わります。



絶景の諏訪湖が見れる本格石挽手打ちそば「登美」にて
温かくて美味しい信州そばを頂きました

甲州街道



下諏訪は中山道と甲州街道が出会う
大社といで湯の宿場町



甲州街道は、甲斐国(山梨県)へつながる道。江戸幕府によって整備された五街道のひとつ。
江戸幕府によって整備された五街道の1つとして、5番目に完成した街道である。江戸(日本橋)から内藤新宿、八王子、甲府を経て信濃国の下諏訪宿で中山道と合流するまで38の宿場が置かれた。近世初頭には「甲州海道」と呼称され、正徳6年(1716年)4月の街道呼称整備で「甲州道中」に改められる。中馬による陸上運送が行われた。江戸の町において陰陽道の四神相応で言うところの白虎がいるとされる街道である。

甲州街道の開設や各宿の起立時期は明確ではなく、甲州街道は一時に整備されたのではなく、戦国期から段階的に整備されたと考えられている。

近世には諸街道の整備が行われるが、甲州街道は徳川家康の江戸入府に際し、江戸城陥落の際の甲府までの将軍の避難路として使用されることを想定して造成されたという。そのため、街道沿いは砦用に多くの寺院を置き、その裏に同心屋敷を連ねた、また短い街道であるにもかかわらず、小仏・鶴瀬に関所を設けている。これは、甲府城を有する甲府藩が親藩であることと、沿道の四谷に伊賀組・根来組・甲賀組・青木組(二十五騎組)の4組から成る鉄砲百人組が配置されており、鉄砲兵力が将軍と共に甲府までいったん避難した後江戸城奪還を図るためであるという。

参勤交代の際に利用した藩は信濃高遠藩、高島藩、飯田藩である。それ以外の藩は中山道を利用した。下諏訪宿から江戸までは甲州街道が距離はより短い、物価が高いことや街道沿線のインフラ整備状況がその主な理由と言われる。尚、宇治探茶使は甲州街道を利用した。

近世には旅の大衆化に伴い甲州道中上の名所旧跡などを紹介した地誌類や視覚化した絵図類が製作されており、絵図では『甲州道中分間延絵図』や『甲州道中図屏風』が知られる。



下諏訪にて諏訪大社下社秋宮の研修です



秋宮にて
女性参加者による
ベストショットです！

池田顧問撮影



紅葉を鑑賞する松浦照子夫人
後ろ姿もとっても素敵です！

諏訪大社下社



春宮



秋宮

全国有数の末社を持つ諏訪大社には、下社と上社があります。上社は、遠く出雲の国譲りで大和朝廷の支配を望まず、国を捨てたタテミナカタと出雲族は浪々の果てに諏訪へ落ち着いて、上社のご祭神になりました。

大和朝廷は、諏訪の出雲族を追跡して信濃国造の「金刺氏」を下社に定着させて、今に見るような諏訪大社が出来たのです。

下社は信国造金刺氏が下諏訪の地に氏神を建立したと言われている。春宮と秋宮を造り、神社を護る鬼門寺を造り、観照寺と三精寺の別当寺を配置して大和朝廷が押し進める支配体系を確立した由緒ある町である。のち上社とともに大和朝廷の支配下に入り、南方刀美神社という名前を貰い、諏訪神社の名の許に全国に一万余の分社を持つに到った。

万治の食べ歩きマップ

- 1 新鶴本店 (生菓子 2個)
- 2 諏訪湖アイス・カフェ中山道
- 3 大社煎餅
- 4 山猫亭 (3店舗)
- 5 信州手焼きせんべい本舗
- 6 専女八幡 (お土産処)
- 7 奏鳴館 (喫茶ソナタ)
- 8 食祭館 (お土産処)
- 9 不二屋
- 10 パン工房たるかわ
- 11 地域開発公社
- 12 アムルーノ瀬洋菓子店
- 13 菱友醸造 (御湖鶴)
- 14 ダイシメ惣菜店
- 15 フレール洋菓子店
- 16 新潟 (大人入浴料金)
- 17 巨過の湯 (大人入浴料金)
- 18 二葉屋酒店
- 19 儀象堂 (入館料など)
- 20 遊泉ハウス児湯 (入浴)

万治の食べ歩きチケット
おもすお名物をご堪能ください

★ 財産区 (公衆浴場) ♨ 足湯

三角八丁 (さんかくばっちょう)
大門鳥居の南側にある大灯籠を頂点として香宮・秋宮までの二辺 (御柱の道筋) と香宮・秋宮を結ぶ中山道を一辺とした三角形を「三角八丁」と呼んでいたようです。(八丁…872.72m)

至 和田峠

至 岡谷

下諏訪 農工会議所

下諏訪 諏訪湖アイス・カフェ中山道
根津八幡美術館
F 諏訪大社下社秋宮

千尋池

専女八幡 (おみやげ処)

信州手焼き せんべい本舗

不二屋

電動レンタサイクル

八十二銀行

パン工房たるかわ

アムルーノ瀬

菱友醸造 (御湖鶴)

ダイシメ惣菜店

儀象堂

諏訪湖時の科学館

青塚古井

今井邦子文学館

新湯

フレール洋菓子店

山猫亭

大社煎餅

二葉屋酒店

祀 米蔵寺

遊泉ハウス児湯

下諏訪町歴史民俗資料館

下諏訪宿本陣

甲州道中・中山道合流之地

1 新鶴本店

諏訪湖オルゴール博物館
奏鳴館

16 17 18 19 20

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15

至 和田峠

至 岡谷

下諏訪 農工会議所

下諏訪 諏訪湖アイス・カフェ中山道
根津八幡美術館
F 諏訪大社下社秋宮

千尋池

専女八幡 (おみやげ処)

信州手焼き せんべい本舗

不二屋

電動レンタサイクル

八十二銀行

パン工房たるかわ

アムルーノ瀬

菱友醸造 (御湖鶴)

ダイシメ惣菜店

儀象堂

諏訪湖時の科学館

青塚古井

今井邦子文学館

新湯

フレール洋菓子店

山猫亭

大社煎餅

二葉屋酒店

祀 米蔵寺

遊泉ハウス児湯

下諏訪町歴史民俗資料館

下諏訪宿本陣

甲州道中・中山道合流之地

1 新鶴本店

諏訪湖オルゴール博物館
奏鳴館

16 17 18 19 20

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15

下諏訪宿



下諏訪宿は、甲州街道の江戸から数えて三十九番目で終点、中山道六十九次のうち二十九番目にあたる宿場。現在の長野県諏訪郡下諏訪町の中心部にあたり、難所であった和田峠の西の入口として、諏訪大社下社の門前町として栄えた。

また、甲州街道の終点でもあり、45軒の旅籠があった。古くは鎌倉時代から温泉の利用が確認されており、中山道唯一の温泉のある宿場であり、当時の絵画などには温泉を利用する旅人たちが描かれている。

天保14年(1843年)の『中山道宿村大概帳』によれば、下諏訪宿の宿内家数は315軒、うち本陣1軒、脇本陣1軒、旅籠40軒で宿内人口は1,345人であった。

下諏訪には宿駅が三ヶ所にあった。戦国時代甲越両軍が対峙した川中島戦の頃は東山田の神宮路に、豊臣秀吉が天下統一の頃は木落とし坂上の「町屋敷」に、そして徳川家康が征夷大將軍になった頃に五街道が整備されて、今の下諏訪宿が生まれた。

いずれの宿駅も隣宿との距離が長いために、殆どの旅人が下諏訪宿に止宿せねばならず、俚謡に唄われたように「木曾の棧太田の渡し 和田の峠がなけりゃよい」となり、下諏訪宿の中心は大変な賑わいを見せたと言われている。

塩羊羹

下諏訪の塩羊羹はその昔から知れているお土産品。

創業明治6年の新鶴本店の初代が考案。海の無い信州では塩は貴重な品、それゆえ、塩の使い方、味わい、思いも深く、塩の調和がもたらす、甘さとの間合いがなんとも美味しい塩羊羹です。初代の製法を今に伝え続けられています。



下諏訪町民俗資料館の研修です
おじさんの熱弁が長すぎて、予定した諏訪湖湖畔の足湯に入れませんでした



甲州街道と中山道の追分にある温泉
「綿の湯」

江戸時代は上湯(武士用)、中湯(地元用)、下湯(一般旅人用)があったそうです

中湯と下湯は混浴
だったそうです





旧本陣にて



旧脇本陣にて



旧商屋にて

旧下諏訪宿の研修です



旧茶屋の今井邦子文学館も研修しました



万治の石仏にて



万治の石仏庭園内の太鼓橋にて
(池田顧問撮影)



甲州街道追分

錦の湯地点で中山道は直角に右に曲がっている。角に脇本陣跡の《まるや》があり、向かいには旅籠だった《桔梗屋》がある。
直進する道は甲州街道で、この地点が終点である。



綿の湯跡

中山道は和田峠と塩尻峠の間を二キロも遠回りして下諏訪宿を開いた。神社と温泉と甲州道中を分岐するためである。
男神(上社)から別離した女神が下社に定住するとき、綿に浸した湯を下げて湖水を渡って着いた場所に湯が湧き出て、通り徑に神渡りが出来たという神話にゆかりの湯である。



歴史民俗資料館

建物は明治初年に建てられたものであるが、江戸時代の宿場商家の特徴を残している。
表は「縦繁格子(たてしげごうし)」の出格子造りで、大戸を入ると「見世」と呼ばれる広い板の間、裏庭へ通ずる土間など宿場の典型的な家造りである。陳列資料には、下諏訪宿・和宮ご下向・樋橋合戦・偽官軍事件などが見られる。



本陣跡

本陣は岩波家として現在も一部が一般公開されている。諏訪大社下社秋宮の境内を借景とし、広大な庭園を持つことが知られていたが、現在は宅地化が進み、一部のみを見ることが出来る。皇女和宮降嫁の際、また明治天皇が宿泊した際奥の座敷を見学することができる。
玄関には、大名家が宿泊している時に掲げる徳川御三家、井伊家などの関札が残っているのを展示してある。



今井邦子文学館

今井邦子は明治時代後半から活躍した短歌をよむ才女であった。先祖は宿内に茶屋松屋を営んだが、邦子は河井醉名や太田水穂に師事し、上京して新聞記者を勤めるなど時代の先端を歩んだ女性である。島木赤彦に師事して歌誌「明日香」を創刊し、文学館の場所で作歌活動を展開した。



伏見屋邸

伏見屋邸は一八六四年(元治元年)の建築と推定される木造二階建ての旧商家。復元修理し、まち歩きを楽しむ観光客の休憩や住民の交流の場として開設しました。手作りのお漬物もおススメ!



万治の石仏

万治の石仏は春宮の西にあります。石仏は以前「烏帽子石」と呼ぶ神官の帽子に似た石でしたが、弟子達が万治三年(一六六〇年)に後方の高い部分を削ぎ落として阿弥陀如来の身体を刻み、別の石で佛頭を乗せた供養墓にしました。石仏は阿弥陀如来の袈裟を纏い、胸に大日如来が線刻してあります。



下馬橋

春宮の大門に太鼓の形をした橋があります。正しくは「下馬橋」と言い、昔は神輿の貴人も馬上の貴人もここで地上に降り立ち、身を清めて神社を参拝するように決められていたといひます。今は遷座祭の神幸だけの通路です。

葛飾北斎画「富嶽三十六景 信州諏訪湖」



諏訪湖から見る富士山絶景ポイント



しもすわまち こはま
下諏訪町 湖浜 裏面地図
④

下諏訪町は、諏訪大社の門前町、また中山道・甲州道中の温泉宿場町として古くから栄えたところ。湖浜からは、湖越しに西日に映える富士山が見られる。

葛飾北斎画「勝景奇覽 信州諏訪湖」



溪齋英泉画「木曾街道塩尻嶺諏訪湖眺望」



歌川広重画「諸国名所百景」「富士三十六景」



本朝廿四孝「八重垣姫」



浄瑠璃及び歌舞伎の演目である『本朝廿四孝』(1766年初演)に登場する架空人物。長尾謙信(上杉謙信)の娘、武田勝頼の許婚として登場する。

歌舞伎では、雪姫(『祇園祭礼信仰記』)・時姫(『鎌倉三代記』)とともに「三姫」と呼ばれており、この「三姫」は赤い衣装を身につけた典型的な姫君役「赤姫」の中でも、特に難役とされている。

『本朝廿四孝』に多くの影響を与えた、近松門左衛門の『信州川中島合戦』に登場する勝頼と恋仲になる謙信の娘・衛門姫と重なる設定をもつ。

武田信玄の六女で上杉謙信の養子・景勝の正室である菊姫がモデルとされている。

諏訪明神から武田家に賜った法性の兜が原因で、長尾謙信が返却しないために両家は不和になっていたが、その和睦のために武田勝頼と八重垣姫の縁組が成立する。

しかし將軍足利義晴が何者かに暗殺されたために、武田家・長尾家は將軍暗殺の疑いを晴らすためにそれぞれの息子の首を室町幕府に差し出した。

八重垣姫は許婚になった勝頼が死んだと思って悲しむが、実は勝頼は生きており、兜を盗み出すため花作りに変装して長尾家に潜入して八重垣姫と対面する。

兜を盗み出そうとし討手を差し向けられた勝頼の命を救うため、姫は兜に祈願する。

すると諏訪明神の使いの白狐は姫に乗り移り、姫は氷の張る諏訪湖を渡って勝頼のもとへ行く。

武田・長尾両家の不和を利用しようと謀っていた悪人たちが滅んだ後、勝頼と八重垣姫は結ばれた。

本朝廿四孝「十種香」



許婚の勝頼が切腹したとの知らせを受けた八重垣姫は、勝頼の姿を描かせて掛軸にし、毎日回向をしています。
「十種香」では、父謙信に召抱えられた簀作(みのさく)という勝頼の絵姿にそっくりな男が登場します。八重垣姫は、その簀作に恋心を抱き、「可愛がってたもるように」と腰元の濡衣(ぬれぎぬ)に取り持ちを頼みます。
八重垣姫は、赤い着付(きつけ)と打掛(うちかけ)を使用するため「赤姫(あかひめ)」という典型的な歌舞伎の姫の役ですが、大名家の姫君でありながら、勝頼に対する恋には積極的な点に特徴があります。

本朝廿四孝「八重垣姫」





高島城内にて

高島城

高島城は長野県諏訪市高島にあった日本の城である。別名は諏訪の浮城や島崎城と呼ばれている。

城郭の形式は連郭式平城である。かつては諏訪湖に突き出した水城で「諏訪の浮城(すわのうきしろ)」と呼ばれていたが、江戸時代初めに諏訪湖の干拓が行われ、水城の面影は失われた。しかし、浮城の異名を持っていたことから日本三大湖城の一つに数えられている。

日根野氏によって総石垣造で8棟の櫓、6棟の門、3重の天守などが建て並べられ近世城郭の体裁が整えられたが、軟弱な地盤であったため、木材を筏状に組み、その上に石を積むなどの当時の最先端技術が用いられた。それでも石垣が傷みやすく、度々補修工事を加える必要があったという。7年間の短期間で築城したため、かなり無理をしたら

しく、地元では「過酷な労役に苦しんだ」「石材を確保するため、金子城の石材は全て持ち出したほか、墓石、石仏も用いられた(転用石)」などの伝承が残る。中世、諏訪氏は現市街地北方にある茶臼山に高島城(茶臼山城)を築いて居城とした。諏訪頼忠は、平城の金子城(諏訪市中洲)を築き、新しい拠点としたが、1590年(天正18年)に諏訪頼忠が武蔵国奈良梨に転封となり、代わって日根野高吉が、茶臼山にあった旧高島城に入城する。

高吉は、1592年(文禄元年)から1598年(慶長3年)にかけて、現在の地である諏訪湖畔の高島村に新城を築く。その際村人には漁業権や賦役免除権などの特権を与える代わりに小和田へ移転させた。高吉は織田信長、豊臣秀吉の下で普請を経験していたことから、織豊系城郭として築城し、石垣を築いて天守も上げた。同時に上原城周辺にいた商工業者を移住させ、城下町の建設を開始した。

1601年(慶長6年)日根野氏は下野国壬生藩に転封となり、譜代大名の諏訪頼水が2万7千石で入封。再び諏訪氏がこの地の領主となり明治維新まで続くこととなった。江戸時代は諏訪藩の政庁であり藩主の居所であった。1786年(天明6年)に石垣などが補修されている。

寛永3年(1626年)には徳川家康六男の松平忠輝を預かる。南の丸を増設し、監禁場所とした。以降も南の丸は、幕府から預かった吉良義周などの流人の監禁場所となる。

1871年(明治4年)廃藩置県により高島県となり、県庁舎として利用された。1875年(明治8年)に天守以下建造物は破却もしくは移築され、一時は石垣と堀のみとなり、翌1876年(明治9年)高島公園として一般に開放され、1900年(明治33年)に諏訪護國神社が建てられる。

現在は二の丸、三の丸が宅地となり、1970年(昭和45年)には本丸に天守・櫓・門・塀が復元され、高島公園として整備された。





「片倉館」温泉入浴前に諏訪名物塩羊羹と松浦さんの手作りパンを頂きました

片倉館



片倉館は、大正から昭和の初期に日本における輸出総額の約4割が絹製品であった当時、シルクエンペラーと称された片倉財閥により地域住民に厚生と社交の場を供するため昭和3年に竣工され、それを運営する(財)片倉館が昭和4年に設立されました。

当時の片倉財閥当主、二代兼太郎社長は大正11年～12年にかけて北中南米～欧州へ全行程約8万kmに及ぶ視察旅行を行い、その際ヨーロッパ各国の農村には充実した厚生施設が整っている事に強い感銘を覚えました。我が国にもぜひそのような地域住民のための施設を提供したいと一族に計り、上諏訪に住民のための温泉、社交、娯楽、文化向上を目的とした片倉館が誕生しました。

特に当時のチェコスロバキア・カルルスバードに在った厚生施設に特に強い関心を覚えたようで自身の日記にも訪問体験を詳しく記し片倉館建設にもそのアイデアが多く採り入れられています。

建物の設計は1897年(明治30年)東京帝國大学(現東京大学)造家学科を卒業、更に5年間同大学院で学んだ森山松之助氏(1889～1949)によるものです。

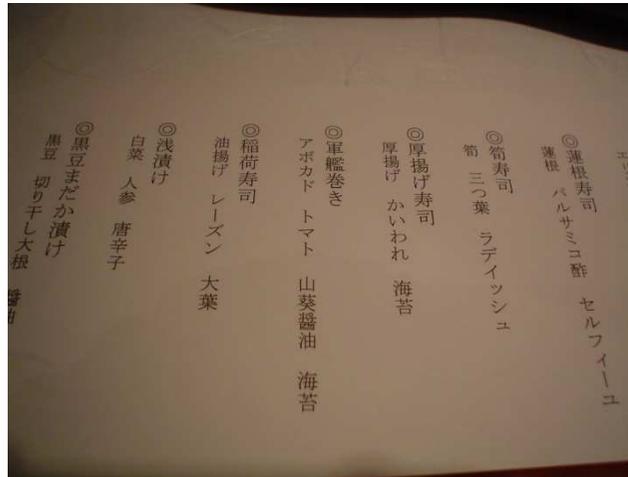
当館は定型的な形式にはあてはめ難い個性的な建物で、強いて言えば1900年前後から30年代にかけて、アメリカ等で発展したゴシックリバイバルまたはロマンティックリバイバルに属すると考えられますが、細部に於いては窓、切妻、レリーフ、ステンドグラス等各時代、各国の様式が巧みに採り入れられ、しかもアンバランスを生じない非凡な設計が施されております。

| | |
|----------|-----------------|
| 着工 | 昭和2年(1927)1月 |
| 竣工 | 昭和3年(1928)10月 |
| 財団法人認可 | 昭和4年(1929)9月 |
| 国指定重要文化財 | 平成23年(2011)6月 |
| 敷地面積 | 3,080坪(10,184㎡) |
| 建物総面積 | 750坪(2,479㎡) |
| 温泉浴場棟 | 鉄筋コンクリート2階建て |
| 会館棟 | 2階建て木造洋風建築 |
| 所有者 | 一般財団法人片倉館 |
| 設計者 | 森山松之助 |



池田顧問撮影

宿泊先の松浦邸にてマクロビの健康野菜にぎり寿司会席料理を頂きました
まずは清里高原ビールで乾杯！ 活性生酒や松浦さんご主人手作りの玄
米どぶろくと甘酒を頂いて盛り上がりました！ 手作りどぶろくは最高です！

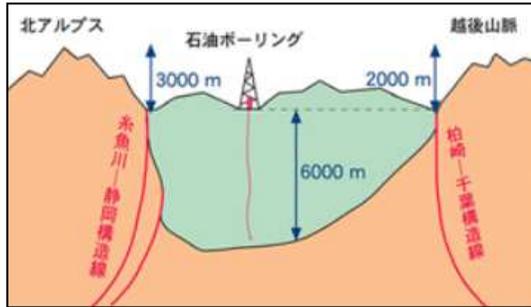


健康野菜にぎり寿司会席料理
池田顧問より嬉しいコメントを頂きました「この料理は銀座では3万円はするよ！」



早朝に予定した「フォッサマグナ研究ツアー」に代わって行った
朝の瞑想の後に松浦邸の庭から見える雲海です

現在のフォッサマグナの範囲 溝の深さは、6000メートル以上



ナウマン博士がフォッサマグナを命名(1886年)してから、120年以上もたちましたから、日本列島の地質調査も大きく進展しました。この結果、ナウマン博士が予想したようなフォッサマグナの東縁を示す明瞭な境界(直江津-平塚線)は見つかりませんでした。

そこで、明瞭な地質学的な溝をさがすとすれば、左の図のように、西縁は糸魚川-静岡構造線、東縁は新発田-小出構造線と柏崎-千葉構造線にはさまれた地域となります。

現在、この地域をフォッサマグナと呼ぶことが一般的なようです(しかし、このフォッサマグナを認めない立場もあります)。この範囲をフォッサマグナとすると、フォッサマグナの中に古い時代の岩石でできた関東山地が残って奇妙です。

しかし、関東山地を、フォッサマグナが落ち込んでできた時の落ち残りだと考えると、現在のフォッサマグナの範囲を受け入れることができそうです。

さて、フォッサマグナの溝の深さはどれくらいあるのでしょうか。左の図で、黄丸印は、深さ6000m級のボーリング調査が実施された位置です。

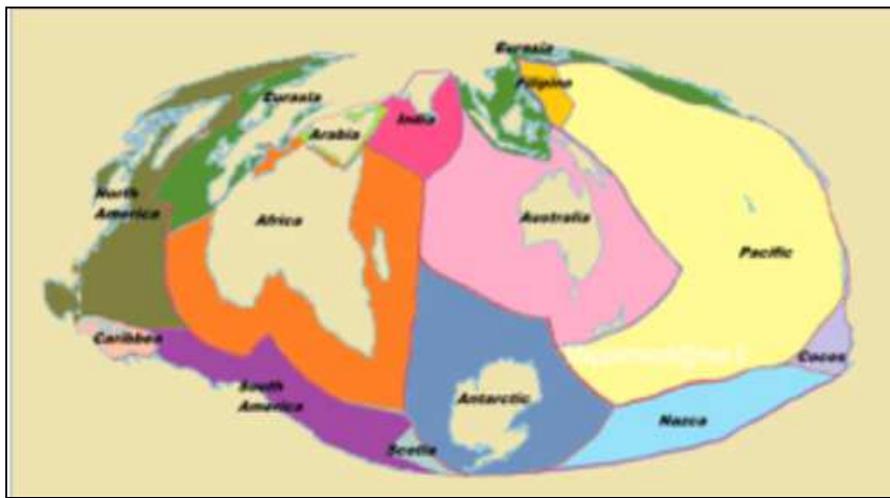
しかし、それらのボーリングは、新しい地層の下にあるはずの古い時代の岩石に到達することができませんでした(上の図)。

したがって、深さは6000m以上ということになります。また、北アルプス(古い時代の岩石)は標高約3000mあり、越後山地(古い時代の岩石)は約2000mありますから、それらの標高を足すと8000m~9000m以上の深さがあることになります。ちょうど、ヒマラヤ山脈がすっぽり埋まってしまう、隠された溝があるのです。

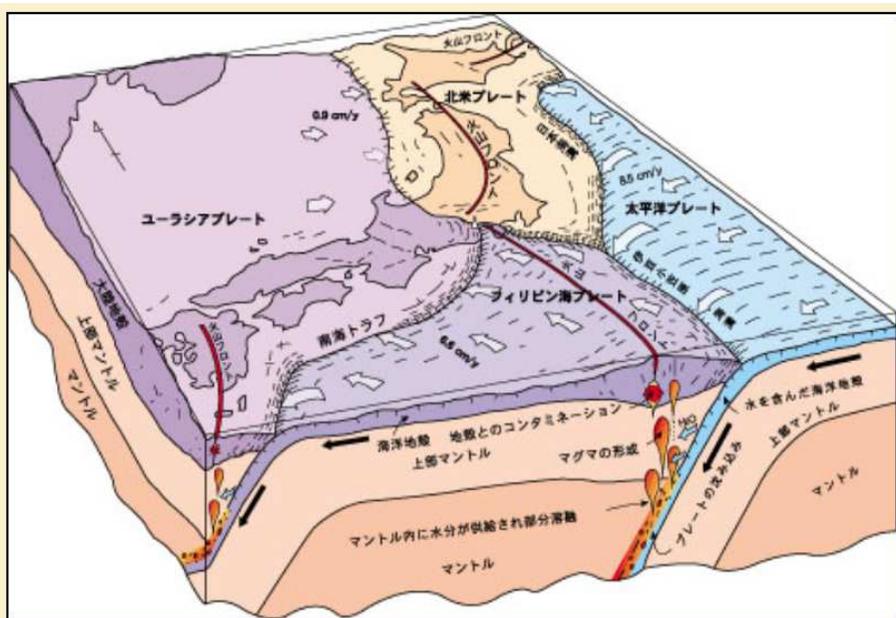


フォッサマグナの範囲は植村(1988)による。

プレートテクトニクス



プレートテクトニクス(英: plate tectonics)は、プレート理論ともいい、1960年代後半以降に発展した地球科学の学説。地球の表面が、左図に示したような何枚かの固い岩盤(「プレート」と呼ぶ)で構成されており、このプレートが、海溝に沈み込む事が重みが移動する主な力になり、対流するマントルに乗って互いに動いていると説明される。



日本列島は、地球を覆っている十数枚のプレートのうち4枚のプレートの衝突部にあつて、世界的にも活発なサブダクションゾーンのフロントに位置している。この列島は北米プレートとユーラシアプレートの2つの大陸地殻にまたがり、さらに太平洋プレートあるいはフィリピン海プレートの沈み込みによって2方向から強く圧縮されている。

最近注目され始めた房総沖と伊豆半島付近の2ヶ所のトリプルジャンクションの存在は4つのプレートがぶつかり、せめぎ合う場として世界に類例がなく、日本列島がいかに複雑な応力場に支配されているかを示している。

マグニチュード7以上の地震は世界中でこの90年間に900回ほど起きているが、そのうち10%もの地震が日本で起きている。マグニチュード8クラスの巨大地震も日本海溝や南海トラフといったサブダクションゾーンに集中し、ここでのプレートの衝突がいかに激しいかがわかる。

さらに太平洋プレートの日本列島下への活発な沈み込みは、日本列島を世界でも有数の火山列島にしている。

このような日本近海のプレート運動は、島弧に強い歪みを与え世界でも有数の地震多発帯、火山活動多発帯といった自然災害の場を形成し、また地殻の上昇も加わって、非常に脆弱な地盤をもつ日本列島を作り上げている。



翌15日 旧甲州街道台ヶ原宿にて



台ヶ原宿
旧本陣「七賢」
にて

江戸勉強会に相応
しい旧本陣の研修
でした

台ヶ原宿



「日本の道100選」にも選定された甲州街道台ヶ原には、今も本陣、脇本陣、問屋場、旅籠などが当時の面影をとどめています。

街道の本陣「北原家住宅」は、嘉永の建築と推定される切り妻屋根の格式高い構えです。参勤交代の大名が宿泊、休息する本陣は宿場でも一番重要な施設で、明治13年の明治天皇巡幸の際も、行在所(あんざいしょ)として西側の座敷が使用されたと伝えられています。往時をしのびながら街道にたたずめば、旅人や馬のひずめの音が行きかう宿場の賑わいが甦ってくるような気さえしてきます。

山梨銘醸の創業は寛延3年(1750)。初代北原伊兵衛光義が高遠から分家して大中屋の屋号で酒造りを創めた。幕末には諏訪高島藩、伊那高遠藩の御用商人を勤め、また台ヶ原宿の脇本陣を兼ねていたほどの豪商である。

建物は天保年間(1830-)から嘉永7年(1854)にかけて完成したとされ、高遠藩主からは竣工祝にと「竹林の七賢人」の欄間一對が贈られた。これが「七賢」の名前の由来。